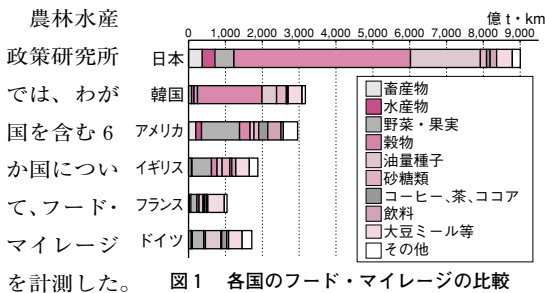


「フード・マイルージ」と食育

イギリスに「フード・マイルージ運動」というのがある。これは、食料の消費量に、その生産地からの距離を掛け合わせた数値（フードマイルズ）を意識し、なるべく地元で生産された食料を消費することを心がけ環境負荷を低減させていこうというもので、わが国における「地産地消」にもつながる取り組みである。

これにヒントを得て、地球環境への負荷という観点を含め、わが国の食料輸入の実態を明らかにするために考案された指標が「フード・マイルージ」である。これは、輸入相手国別の食料輸入量にわが国までの輸送距離を乗じ、その国別の数値を累積した数値であり、単位は $t \cdot km$ （トン・キロメートル）で表わされる。



わが国のフード・マイルージの特徴 これによると、わが国のフード・マイルージの総量は約9,000億 $t \cdot km$ となり、これは、わが国内における1年間の全貨物輸送量の約1.6倍に相当する。また、諸外国と比べると、韓国・アメリカの約3倍、イギリス・ドイツの約5倍、フランスの約9倍という大きな水準にある。

次に、わが国のフード・マイルージの構成をみると、品目では穀物（51%）、油糧種子（21%）で全体の7割強を占めるとともに、輸入相手国別ではアメリカが59%を占めている。これは、大量の飼料用トウモロコシや大豆等を遠隔地であるアメリカから輸入しているためであるが、諸外国は、わが国ほど特定の品目や輸入相手国に集中していない。

このようにわが国のフード・マイルージの大きさは際立っているが、これを輸入量と平均輸送距離に分割

したのが次の図である。

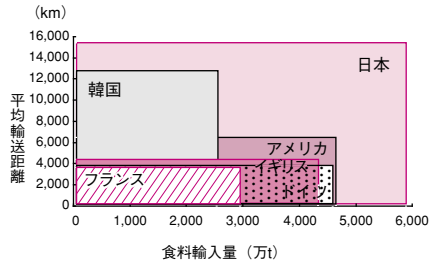


図2 各国の食料輸入量と平均輸送距離

アメリカはカナダやメキシコ、フランスはベルギーなど近隣国からの輸入が多いのに対し、わが国の輸入食料の平均輸送距離は約15,000kmと、東京からケープタウンまでの直線距離にほぼ等しい。

このように、わが国の食料輸入を特徴づけているのは、その量の大きさもさることながら、諸外国に比べかなりの長距離を輸送されてきていることにある。

食料輸入と地球環境 次に、フード・マイルージを基に、一定の仮定の下で食料輸送に伴って排出されるCO₂の量を試算した。わが国の輸入食料の国際輸送の過程で排出されるCO₂の量は約1700万tと見積もられたが、これは、わが国国内の食料輸送に伴うCO₂排出量の倍近い量である。このように、わが国が行っている大量かつ長距離の食料輸入は、その輸送の過程で地球環境に対し相当程度の負荷を与えている状況がうかがえる。

わが国のフード・マイルージがこのような大きな数値となっている原因は、実は、私たち自身の食生活にある。食生活の急速な変化、すなわち米消費の減少と畜産物や油脂の大幅な消費拡大は、結果として、栄養バランスの崩れと生活習慣病の増加、国内農業の衰退と食料自給率の低下といった問題のみならず、大量の輸入食料の長距離輸送に伴う地球環境への負荷の増大という問題まで引き起こしているのである。このような状況を認識し、自分の食のあり方を見直していく「食育」が、今、私たちに求められている。

出典：<http://www.primaff.affrc.go.jp/seika/kankou/seisaku/5/seisakukenkyu2003-5-2.pdf>

（農林水産省関東農政局消費生活課長 中田哲也）